令和7年度中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業 事後報告書

◆名前： 櫛橋俐心

江西省及び南昌市に滞在中の様子や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。
(1,000字程度)

今回の中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業への参加は、私にとって大きな意味を持つものでした。中学一年生の時に南昌市への派遣団員に内定していたものの、新型コロナウイルスのパンデミックにより中止となって以来、6年越しに南昌市訪問が実現したからです。

待ちに待った南昌市では、南昌高松中日友好会館を訪問し、さらに日中青年友好交流会歓迎レセプションに参加しました。南昌中日友好会館では、南昌市の歴史を学んだり、中日友好会館の中にある日本語教室を訪問したりして、とても充実した時間を過ごしました。何よりも嬉しく、驚いたことは、三年前、私が高校1年生だった時に参加した高松市・南昌市のオンライン交流会にて、私が制作した和歌を題材とした色紙が飾られていたことです。日本の文化の一つである和歌を紹介するために作った色紙が、海を越えて日中友好の架け橋である友好会館に展示されているとは思っていませんでしたが、私自身も架け橋を構成するパーツのひとつになることができているように感じられ、強く印象に残りました。日中青年友好交流会歓迎レセプションでは、高松市代表の団員全員でダンスを披露しました。数年ぶりのソーラン節で太ももが悲鳴を上げましたが、多くの方々に見てもらい、楽しんでいただくことができました。夕食では、日本語学校に通う中国人の方々たくさん会話をしました。会話をしていると、皆さんが日本語を学ぼうと思ったきっかけの多くは日本のアニメや音楽でした。私は普段、アニメはあまり見ないので、夕食会の場で逆に日本のアニメ文化を詳しく知ることができました。一方、大学で第二外国語として中国語を選択している私が中国語を学ぼうと思ったきっかけは、中国のドラマであり、そのことについて話すと、とても嬉しそうに中国のドラマについて詳しく教えてくれました。夕食会が終わり、お別れの時間になると名残惜しい気持ちでいっぱいになりましたが、今度日本に留学に来てくれるそうなので、また会える日を心待ちにしながら、私も中国語の勉強に励みたいと思います。

3日目以降に滞在した景德鎮市では、多くの焼き物に触れる機会に恵まれました。高校時代に世界史と日本史の両方を選択していたため、景德鎮が古くから陶磁器の名産地であることは知っていたのですが、やはり本物を目の前にすると、写真からは感じることはできない、焼き物としての完成度の高さや、中国の長い歴史がひしひしと伝わってきました。また、景德鎮芸術職業大学を訪問した際には、広大な大学の敷地と大きな建物に圧倒されました。私の通っている大学は、キャンパスが一つしかなく、少人数教育を行っており、大学としては規模が小さいため、トウクトウのような乗り物に乗ってキャンパス内を移動することや、大きな階段教室には驚きを隠せませんでした。さらに、景德鎮では、瑶里古镇などの露店が並ぶ場所に多く訪問し、楽しく買い物をする機会を得ることができたと同時に、4月から大学で学んでいる中国語の実力を思う存分試す機会にもなりました。買い物の場面において、自分の言いたいことを主張することはある程度できたように思いますが、相手側の主張をすべて聞き取れたことに悔しさが残っていますが、改めて語学の楽しさを実感することができました。

最後に、中国での素晴らしい6日間を過ごすことができたのは、今回の訪問団を引率してくださった牧野団長、王さん、さらに都市交流室の満さん、また、南昌市外事弁の姫さん、黄さんなどをはじめとする日中のたくさんの方々、訪問団員の皆様のおかげであることに心からの感謝の意を表します。

この先も、高松市と南昌市の友好が末永く続くことを心より願ってやみません。